

## 植民地期南部アフリカにおける『風景』の形成 : ジンバブエのMatopos Hillsを素材にして

その他のタイトル	Making Southern African Land into Colonial Landscape : with special reference to the Matopos Hills in Zimbabwe
著者	北川 勝彦
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	41
ページ	51-64
発行年	2008-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/2849">http://hdl.handle.net/10112/2849</a>

# 植民地期南部アフリカにおける『風景』の形成

—ジンバブウェのMatopos Hillsを素材にして—

北 川 勝 彦

Making Southern African Land into Colonial Landscape:  
with special reference to the Matopos Hills in Zimbabwe

KITAGAWA Katsuhiko

This study is a part of wider research in which this author has been so far investigating into various aspects of liberation struggles in Southern Africa. In particular, discussions have been focused on the relations between guerrillas war and peasant society and legacies of liberation struggles in the post-independent Zimbabwe. It is also intended to research on decolonization of imaginations which had been constructed under the European colonial rule in Africa. Visual images invented under colonialism have played significant roles in disseminating political landscape of Southern Africa. This means that the study is not only about visibility but also cultural contacts and political encompassment engendered by European expansion in Africa. Specific attention is paid upon the Matopos Hills south of Bulawayo in colonial Zimbabwe. In the process of colonization, European settlers explored, exploited and conquered the new lands and converted landscapes of the Matopos to their own one. In other words, Europeans tried to make colonial landscapes fit with their concept of what they had learned in Europe. To begin with, the word pictures by Thomas Baines, the main producer of visual images of the nineteenth century Rhodesian landscape is analyzed. To the next, the meaning of Rhodes' interment in the Matopos is considered as one of the most significant rituals of colonization of landscape. After his funeral on April 10th 1902 nothing was spared in installing Rhodes as the "spirit" of the land. Finally African view of the

Matopos is taken not merely as the site of struggle but the deeply rooted imaginations of their landscape in the late 1970s liberation struggles. For African people the cave is the nucleus of a living and active landscape and Mwali cult and shrines of the Matopos does all things to the landscape of the hills. There is no doubt that combination of stone and water is central to their imagination of the landscape of the Matopos. This had been shaped by an interaction with hunter-gatherers, cultivators and cattle-keepers for thousands of years although it seemed to nineteenth century European travelers so wild.

## 1 はじめに

### 「帝国とイメージ」の問題

人々は、日常、いたるところに存在するイメージの中で暮らしている。そのイメージの何が現実的（real）なのか、あるいは何が表象的（representational）なのかについて人々の意識の中でせめぎ合いが生じる。そうしたせめぎ合いの中には、深刻なものもあれば、時には滑稽なものもある。また、人は、自らがイメージする側とイメージされる側のいずれの側で見るかによってどれほど異なったイマジネーションが生まれるかを知ることもあるだろう。

一枚の絵とその観察者は、通時的にもまた共時的にも、観察者が絵の中に没入し、絵の中の世界を経験したと自覚する場合もあれば、両者がもっと広い世界の中に包みこまれていると感じる場合もある。すなわち、イメージは、一つのアドレスを持つが、それを超えてはるかに広い空間を包み込み、場合によって透明ともなり、不透明ともなる。これらの属性は、人々の意識（consciousness）のあり様を説明するものでもあろう<sup>1)</sup>。

ところで、ローランド・バース（Roland Barthes）の著した『神話学』（*Mythologies*）の中に次のようなエピソードが掲載されている。

「私が床屋にいくと、『パリス・マッチ』（*Paris-Match*）を一冊差し出された。その雑誌のカバーには、フランスの軍服を着た若い黒人が敬礼をしている場面があった。彼は臍をあげて、三色旗に注目して敬礼している。これがこの絵の語るすべてである。それが私に示唆するものは、フランスは偉大な帝国であり、その息子たちはすべて肌の色の区別なく国旗の下で誠実に奉仕しており、植民地支配を中傷する者に対しては、自らの抑圧者に奉仕しているこの黒人の示す熱意にまさる解答はないということであった。<sup>2)</sup>」

このようなフランスの愛国者としてのアフリカ人の肖像は、アフリカ人の「他者」をフラン

ス国家のモラルの構造に包み込むことでナショナリストの感情を刺激する。この肖像は、フランス帝国の風景を記録し、偽造し、神話化しているが、フランスの支配に敵対してアフリカの植民地の反乱が同時に噴出している状況を押し隠している。

こうしたタイプの表象は、「神話」となり、その絵のもたらすニュートラルな情報は、世界と世界秩序のビジョンを伝達する。同様の神話は、映画、広告（宣伝）、エンターテインメント、料理などのポピュラー文化に表れ、国家のプロジェクトを消費の局面に持ちこむ。そうした神話は、一般の人々の生活の中で広範に、また無害を装いつつ流布することで、大衆の意識を帝国の利害に自然に従わせ、一つの共通した「市民の神話」の中にはめ込んでしまう。この状態は、帝国が解体した後でさえも持続する<sup>3)</sup>。

以上のようにイメージの形成に注目する理由は、それが表現の有効な媒体となるだけでなく、多様な形で複雑な意識を圧縮して見せており、文化の境界を超えて言語以上に容易にしばしば移動するからである。ビジュアル（可視的）なものは、多様な社会的および歴史的コンテキストに応じてその意味づけが単純化される場合もあり、複雑な意味づけが行なわれる場合もある。こうしたイメージ—具体的には「帝国とイメージ」—に注目することで、たとえば、アフリカにおけるヨーロッパの拡大によって産み出された「文化的接触と政治的封じ込め」(cultural contact and political encompassment) について考えることができるだけでなく、それとは逆にアフリカの脱植民地化のプロセスの中で帝国主義の表象がどのように読みなおされ、再定式化されるかを検討できる。そのような考察を通じて脱植民地化の意味を考えることができるであろう<sup>4)</sup>。

### ジンバブウェにおける脱植民地化と解放闘争

本稿は、南部アフリカに位置するジンバブウェ共和国の脱植民地化過程と解放闘争における政治、軍事および農民社会の関係とその後の遺産などの多様な側面について筆者がこれまで行ってきた研究の一部をなしている。ポルトガル領アフリカでは、ヨーロッパ人の支配が1974年と1975年の間に最終的に排除された。その後、白人少数支配が残ったのは、ローデシア（ジンバブウェ）と南アフリカであり、南アフリカの支配したナミビア（南西アフリカ）であった。これらの地域では脱植民地化過程で解放戦争が続けられたが、その成功の程度はさまざまであった。それぞれの事例について詳細な考察が必要であろうが、この「遅れた解放」は、解放闘争それ自体について再評価を迫るものであった。アフリカ解放の「第一の波」の指導者は、去り行く列強からの権力の拘束と対峙したが、独立にともなう将来については楽観的であった。しかし、この楽観論は、1960年代末には消え去った。その後の解放闘争は、異なる種類の「自

由」を求め、それは、単に黒い顔と白い顔を入れ替えるだけでなく、権力自体の性格を変えようとするものに向かっていったのである。ポルトガル領アフリカ、ローデシアおよびナミビアでは、ナショナリストは、「解放は民衆に利益をもたらし、解放は民衆の参加からもたらされる」との考え方のもとで「人民戦争」を開始した。このことは、都市の解放闘争の担い手と農村部の支援者をつなげる多様な要因の究明の必要性を示唆している<sup>5)</sup>。

1970年代と1980年代におけるアフリカ解放の「第二の波」は、1950年代と1960年代の「旗の脱植民地化」とは異なっていた。すなわち、ポルトガル領と南西アフリカでは、植民地権力側が居座ることを決意し、ローデシアと南アフリカでは、白人少数派は政治と経済に深く根をはっていたからである。それぞれの解放闘争にかかわった人々は、請願や市民の不服従運動には特定の歴史的コンテクストからはずれると限界があることを学んだ。旧ポルトガル領やローデシアでは、解放闘争は、都市の拠点を手放して、ゲリラ戦争に転じたことで、各地の闘いに成功を収めた。ゲリラにとって農民の間に同感を確立することは物的な支援と保護が得られることを意味したからである<sup>6)</sup>。

以上の背景の下で、帝国が権力を放棄することに対してもっとも執拗な抵抗を試みたのは、数多くの白人入植者のいた南部アフリカの植民地であった。本稿でとりあげるローデシア（植民地期ジンバブウェ）の入植者たちは、黒人多数派に権限を委譲する方向に進んでいたイギリス帝国およびコモンウェルスにおける自らの地位を諦めてまで白人支配を維持しようとした。イアン・スミス首相（Ian Smith）の下で発せられた1965年の一方的独立宣言（UDI）は、白人の土地所有権と人種隔離を強行する官僚と警察の権力装置を堅持しようとするものであったが、それは自らを帝国から切り離すものでもあった。アフリカ人の政治運動がゲリラ戦争に転換したとき、ローデシア国家は、その攻撃に懸命になって抗戦したのであるが、武装ゲリラがすでに解放された近隣地域に聖域をもっていたという地域固有の問題と世界的規模での経済制裁や政治的孤立に直面しなければならなかった。ジンバブウェにおける脱植民地化過程での解放闘争は、ヨーロッパ人による文明化と世界のブルジョワジーによって供与される治安維持と成功の機会に参加しているというローデシア白人の「帝国意識」（imperialist mindedness）とそれを反映して形成された「植民地的風景」に対して、自らの手で営々と農村社会を築き上げてきたジンバブウェの「農民意識」（peasant consciousness）とそれを根底から支える「原風景」を奪い返そうとした闘いであったと言えるであろう。それを象徴する一例として、ジンバブウェ解放闘争の重要な舞台となり、その表象ともなったマトポの丘（Matopos Hills）をあげることができる。

## 2 アフリカ史研究における「風景」

アフリカ史家は、これまでさまざまな歴史的事象について「発明（創造）」(inventions) や「心象」(imaginings) という概念に依拠しながら研究を進めてきた。その中でもっともすぐれた成果として、たとえばテレンス・レンジャーの『伝統の創造』や『部族主義の捏造』をあげることができる<sup>7)</sup>。

それと並んで、「風景の構築」(Construction of Landscape) がアフリカ史家にとって重要なテーマになるのはもはや時間の問題であると考えられてきた。事実、それは、アフリカにおける植民地支配の歴史を研究している歴史家にとってはとくに重要なテーマである。南部アフリカに入植したヨーロッパ人は、新しい土地を探索 (explore) し、開発 (exploit) し、征服 (conquer) した。植民地化のプロセスの中で、ヨーロッパ人たちはアフリカ人の土地を自らの「風景」に次第に転換 (convert) していった。「風景」に転換するという意味は、その土地をヨーロッパ人のイマジネーションのもとに屈服させ (submit)、ヨーロッパ人の文化に取り込み (appropriate)、ヨーロッパ人の歴史にそれを書き加えてしまう (annex) ことである。

ところで、アフリカにおける風景に関する新たなパースペクティブが、近年の諸研究の中で示されるようになった。たとえば、デイビッド・コーヘンとアティエノ・オディアンボ (David Cohen and Atieno Odhiambo) によるケニアの「シアヤ (Siaya) 地域」に関する研究やレンジャーによる南西ジンバブウェの「マトポの丘」(Matopos Hills) に関する研究をあげることができる。これらの研究で明らかにされた点は、人々の営みがそれぞれ他とは異なる歴史的風景と密接に結びついているということであった。とくに強調されたのは、「風景のダイナミズム」がさまざまな人間の社会的および政治的行動を通して競合しつつ形成されていく持続的なプロセスとして理解されねばならないということ、そしてこのプロセスは、「歴史の沈殿物」(sedimentation) としてではなく、「過去の経験と未来の可能性の持続的な再形成」(continuous reworking) として分析されるべきであるということであった<sup>8)</sup>。

本稿では、以上の問題を考察するにあたって、ヨーロッパ人たちが、植民地支配の下においたアフリカの風景を自らの出自社会たるヨーロッパで得られた概念にふさわしいものに作り変えていこうとする試みとそれとは異なりアフリカの土地にもとから暮らしてきた人々の風景に対する見方について、具体的には南部アフリカのジンバブウェ共和国 (旧ローデシア) のマタベレランドに位置する「マトポの丘」をとりあげて検討する<sup>9)</sup>。(図1参照)

今日「マトポの丘」を訪れると、南部アフリカのイギリス帝国建設者セシル・ローズ (Cecil John Rhodes) の征服が完成したかのような感じがする。サファリのガイドはまず観光客をロ

ーズの墓に連れて行き、その周辺の丘を指して、1896年のマタベレ戦争が行なわれた戦場であったと告げるだろう。イヌング（Inungu）では、キリスト教徒がマトポの丘を征服したことを象徴するものとして1982年に建てられた大きな十字架をみるだろう。晴れた日には、南方にヌジェレレ（Njelele）が見えるが、ガイドはそれを詳しく説明することはない。「マトポの丘」のアフリカ史（African History）は、洞窟壁画以外には語るものはいない。そして、それぞれの岩の名称と意味づけは、今もなお白人入植者の歴史上の出来事を記念する碑文によって解説されている<sup>10)</sup>。

### 3 ベインズの南部アフリカ旅行とマトポの丘（Matopos Hills）の記述

マポトの丘の風景認識を考察するにあたって、19世紀の南部アフリカを旅したトーマス・ベインズ（John Thomas Baines、以下ベインズと表記）、フランク・オーツ（Frank Oates）、エドゥアルド・モール（Eduard Mohr）などの作品に思い至る。本稿では、その中でベインズの記述を手がかりとして取り上げて検討する。

#### ベインズの南部アフリカ旅行

ベインズは、1820年11月27日にイングランドのノーフォークのキングズリン（King's Lynn, Norfolk）でジョン・ベインズとメアリーの長男として生まれ、1875年5月8日に南アフリカのナタール植民地のダーバンで没した。成長したベインズは、徒弟期間を終えた後、南アフリカ行きを思い立ち、1842年11月23日ケープタウンに到着した。ケープタウンでは、彼は、約3年間、専門的な船の塗装業者となった。しかし、ベインズは、ウイリアム・コーンウォリス・ハリス（William Cornwallis Harris）の著した*The wild sports of southern Africa*（1839）に刺激されて、次第に南アフリカ旅行への思いを募らせ、1848年2月5日、アルゴア湾（Algoa Bay）にむけて出帆した。ベインズは、グラハムズタウンのウイリアム・ポッター（William Potter）の宿に根城を構えた。ここは、彼が後の5年間にわたる南アフリカ遠征の拠点となり、この時代の多くの油絵が生み出される場所となった<sup>11)</sup>。（図2参照）

ベインズは、南アフリカ滞在中の最初の旅行以来、自らのスケッチに基づいて絵を描くときに当時の出来事を思い出すために日記（Journal）を書いていた。これらのスケッチは、鉛筆で描かれたり、多くは水彩で描かれたものである。スケッチの多くは、ジョハネスバーグの巨大企業アングロ・アメリカン社の経営者であったオッペンハイマー（Ernest Oppenheimer）が所有した『ベインズ・アフリカ・コレクション』（the Baines African collections）の中に収められている<sup>12)</sup>。

ベインズがイギリスに帰国していた時、リビングストーン (David Livingstone) は、ザンベジ遠征の一員に彼を画家および資材倉庫管理人として選んだ。一行は、1858年3月10日、パール号でイギリスを出帆した。しかし、これはベインズにとって不運な遠征であった。というのは、彼は、不当にも盗みの咎で責められ追放されて、失意のうちにケープタウンに戻るようになったからである。彼は、リビングストーンに再調査を求め、自らの汚名を晴らそうとしたが、リビングストーンはその申し出を拒絶した。ベインズは、ケープタウン滞在中、オーストラリア遠征の過酷さ、ザンベジ旅行での過労、不当な非難についての心労が重なって、闘病生活を余儀なくされた。病気から回復すると、彼は、ジェームズ・チャップマン (James Chapman) の遠征に加わり、南西アフリカを通り抜けて、ヌガミ湖を経て、ビクトリア瀑布に達している<sup>13)</sup>。

その後、ベインズは、1865年6月から1867年12月までイギリスに滞在したが、ロンドンにいる間、南アフリカ金鉱探索会社 (South African Gold Fields Exploration Company) からマタベレランドへの遠征を率いるように要請された。彼は、1868年に再度ダーバンにむけて出帆した。彼は、1869年と1872年の間にマタベレランドへの遠征を2回実施している。その結果、マタベレ王のロベンクラ (Lobengura) との鉱物資源開発のコンセッションの獲得に成功した。ベインズは、マタベレランドへの3回目の遠征を準備しているとき、ダーバンで、彼の従兄弟のジェームズ・ワトソン (James Watson) の自宅で、赤痢のためにこの世を去った。この2回の旅行の途中で記された日記は、後にウォリス (J.R.R. Wallis) の編集で『トーマス・ベインズの北方金鉱日記、1869—1972年』として3巻本で出版された<sup>14)</sup>。(図3参照)

### ベインズのマトポの丘の記述

南部アフリカのジンバブウェ共和国の南西部はマタベレランドと呼ばれており、その中心都市にあたるブラワヨの南に人目をひく花崗岩でできた丘があつまっているマトポと称される場所がある。このマトポの歴史は、非常に興味深い。この土地には、ローズが埋葬されており、ヌジェレレやその他、最高神ムワリと雨乞い寺院 (High God, Mwali) の信仰が残っている。注目すべきは、この丘についての19世紀の絵画が一つもないように思われることである。これは、当時の画家たちがこの丘を見なかったというわけでは決してない。実際に、この岩の丘はヨーロッパ人の旅行者には粗野な風景のように思われたが、マトポは、マタベレランドへの主要なルートであり、この丘を通過する旅はあらゆるビクトリア時代の旅行者の語りの常套句であった。この土地を旅したベインズも、「ビクトリア瀑布」(Victoria Fall) を描いているが、「マトポの丘」を描くことはなかった。(図4、図5参照)



なぜこのようなことが生じたのであろうか。技術的には、瀑布は丘よりも描くのは難しいと言われている。それにもかかわらず、瀑布の方が即座に認識可能なカテゴリーとして当時の画家の目には入ってきたように思われる。瀑布は、人々の認識の中では、文化と歴史を超越する自然の類稀な驚異の一つであって、それには賞賛し、記録されるべきものがあったのであろう。これに対して、丘は、このカテゴリーには入らなかったようである。丘は、初期の旅行者の心に美しいものとして印象づけるものであったし、景色としてもすばらしいものであった。ところが、これも風景として絵に描くには、ヨーロッパ人の目から見れば欠けているように思える何かが必要であったのだろう。たとえば丘には、城、人里はなれた住処あるいは人間との交流を示す他の兆候が必要であった。それらの要素は、19世紀の著名な風景画の特徴を表すものであったからである<sup>15)</sup>。

ペインズにはマポトの丘を描けなかった言い訳があった。というのは、彼は、画家であると同時に鉱物資源の探索と埋蔵地での鉱物採掘権を得るプロジェクトを携えて行動する人物であったからである。したがって、ペインズは、時をおかずに山々をとおり抜けて、ロベングラの土地に急いで到着し、金の採掘コンセッションを得なければならなかった。ペインズの次のような記述は、彼の立場をよく物語っていた。

「道路のさまざまな曲り角で開ける風景は実に美しく、喜んでそれらをスケッチしたかったのであるが、急ぎ旅のためにそうすることができなかった。」

「われわれの進む道は、花崗岩の丘の間にある起伏に富んだ地方に伸びている。この丘のいくつかは、相当に巨大なもので、美しい形をしており、グレーや時にはほぼ白色の大量の岩が、巨大な柱や尖塔やお城のように聳えていた。」<sup>16)</sup>

ペインズは、19世紀ローデシアの風景の可視的なイメージを広める主要な人物となっていた。彼の絵画は、大量に複製され、後のローデシア白人のイメージネーションを形成する役割を担った。ジンバブウェが独立した1980年、この土地を逃れ、南アフリカに向かった多くのローデシア白人たちは、このマポトの丘の水彩画を持っていたと伝えられている。

これに加えて、マポトの丘に対するキリスト教ミッションの反応は、19世紀のヨーロッパ人が風景と向き合うもう一つ別の重要な側面を示した。すなわち、画家にとって、風景は、「歴史と文化のつながり」(associations)をイメージするものであった。探索人にとって、風景は「利用される」(to be used)のを待ち受けている対象であった。宣教師たちにとって、風景は、「救済されるべき」(to be redeemed)のものであった。イエズス会の宣教師たちは、1879年にマト

ポの丘に入り、その土地がアフリカ人の信仰の場であることを知った。ここにはムワリの託宣を告げる霊媒者がいて、神の声（Voice of God）は、岩や洞窟から話された。しかし、宣教師たちの目から見れば、マトポの丘の風景は悪魔の仕業を表現しており、アフリカ人の住民たちは恐るべき自然におお奴隷化されたままであると解された。そこで、イエズス会士は、救済されていない自然のためにキリスト教の「救済の文化」と「約束の行為」として丘の洞窟で最初のミサの儀式を行った。しかし、間もなくイエズス会士はその地を去り、ほぼ20年間マトポの丘は彼らの言う恐るべき神々の手に委ねられたのである<sup>17)</sup>。

#### 4 マトポの丘と「風景の構築」

##### マトポの丘とセシル・ローズの埋葬—風景の植民地化—

1896年3月、多くのヌデベレ人は、彼らの間に定住し始めた白人の探鉱者、伝道者、商人に敵対して立ち上がった。多くのヌデベレの戦士たちは、ブラワヨが包囲された後、マトポの丘に撤退する。この戦いに従軍したイギリスの兵士にとって、マトポの丘は、戦場としては恐ろしく困難な場所であった。また、彼らは、もはや丘を人の住んでいない土地とは見なかったし、そこに暮らす人々を「自然の奴隷」と見ることもなかった。

プーマー大佐の騎兵連隊に配属されていたサイクス（Frank Sykes）は、セシル・ローズとヌデベレ人の首長たちとの最初のIndaba（会談）の直後、4人の従者と1台のカメラを携えて、被写体を求めて出発した。彼の著書には数多くの写真—兵士、砦、敗北した敵、戦場となったマトポにおける個々の丘—が収められているが、これらは、人間に「教化された風景」（humanized landscape）と言える<sup>18)</sup>。

ヌデベレとの戦闘も終盤にさしかかった頃、ローズは、ゆるやかな坂道の続くすばらしい景色を見晴らせる大きな丘に出会った。彼は、即座に、ここに埋葬してもらいたいと宣言する。このマトポの丘において、ローズは新しい植民地の英雄神話の中に自らの永眠する場所を得ることができたのである。その神話とは、「ローズこそ、自らの人生を意のままにし、武器を携えることなく丘に入り、首長たちとの会談によって流血の殺戮に終止符をうった人物であった」というものである。マトポの丘で行われたローズの埋葬は、「ムジリカジ（Mzilikazi）よりも強い男が・・・死後もこの土地を所有」し、「見晴らしの良い地点から彼の魂は自らの征服地を監視しつづける」ことを意味した。この儀式は、その土地に長く暮らしてきたアフリカ人にとって、「ムワリの神は、白人のもとに赴いた」と解釈され、恭順の魂のよりどころとなった。1902年4月10日の葬儀に、マシヨナランドのビショップは、ラドヤード・キプリング（Rudyard Kipling）の詩を詠唱したと伝えられている<sup>19)</sup>。

ローズの埋葬後、マトポの丘は、白人ローデシアの風景のアイコンとなった。たとえば、アラン・ウイルソン（Alan Wilson）のパトロール隊（Shangani Patrol）の遺品は、グレート・ジンバブウェ（Great Zimbabwe）から取り除かれて、ローズの墓の近くに埋められた。ボーイスカウトは、マトポの丘の岩にバーデン・パウエル（Baden Powell）への賛辞を刻んだ。このようにローズの墓は、ローデシア白人の巡礼の地となり、マトポの丘に近接する土地は白人の遊び場となった。岩や水溜りや洞窟には、それぞれに白人たちによって思い思いの名称—ビクトリア女王、ダイアナのプール、悪魔の洞窟—がつけられた<sup>20)</sup>。

### キリスト教ミッション—農業開発と風景—

他方、丘の周辺の土地は利用（used）され、自然は人間の活動に従属（subdued）させられた。たとえば、Brethrenのミッションナリは、1898年に東マトポに到着した。彼らは、アメリカ中西部の出身で、当初、イギリス南アフリカ会社（British South Africa Company）から割り当てられた土地に不安を感じていた。というのは、その土地は、巨大な花崗岩の丘と巨岩に囲まれており、そうした岩が何百エーカーもの土地を覆っていて、したがって、岩がこの土地の主要な部分を構成しているかのように思われたからであった。しかし、やがてこの土地の豊かさがわかってくると、自信を取り戻した。

Brethrenには、この土地の牧歌的な風景を自然のままにしておく考えはなかった。彼らは、果樹を植え、鋤で耕し始めた。「茶会（tea-drinks）」を開いて、土地の人々を鼓舞し、鋤を使って10エーカーのミッションの農場を開かせた。そしてクビキ（軛）をつけるために雄牛を訓練した。1910年代初頭、この谷には、アフリカ人の農民（ploughman）が密集して定住するようになった。1922年、植民地政府の監督官は、キリスト教徒の企業家精神を発揮して生まれた新しい風景を賞賛したのである<sup>21)</sup>。

## 5 むすび—脱植民地化の意識とマトポの丘の信仰—

北東ジンバブウェとモザンビークの山境では、「ニャチランガ・カルト」（Nyachiranga Cult）の信仰が続けられてきた。ニャチランガの山中では、シヨナの人々の最高神（High God）のジバグル（Dzivaguru）の声が洞窟から聞こえると伝えられている。ジバグルは、「大きな水溜り」という意味で、最高神ムワリを賞賛する名である。この洞窟は、不測の事態の生起に恐れおののいたこの土地の人々が悪魔のように恐ろしい神をなだめる場所などではなかった。洞窟は生活の源泉であった。また、洞窟は、土地に暮らす人々の歴史の焦点（focus of History）であった。そこに代々の首長が埋葬され、洞窟の岩は神の声（the Voice）の鎮座するところ、すべて

の託宣の中心、権威の最高点として屹立していた。神の託宣(お告げ)のすべては、土地と人々の関係、および土地に対する人々の責務に関するものであった。この洞窟は、「生きた風景の核」となってきたのである。

したがって、1970年代後半のジンバブウェの解放戦争では、この土地は死者と生者の間、人々と環境との間の協力の舞台となった。都市のゲリラ戦士たちは、ニャチランガの洞窟に隠れることで土地の農民たちの協力と神の最大の加護を与えられた。ニヤマハサ川(Nyamahasa)は、増水のために水位が上がり、ローデシア軍(Rhodesian Security Forces)は、川を渡れなかったのである<sup>22)</sup>。

同じようなことがマトポの丘のムワリ・カルトについてもいえる。マトポの丘には、4つの大きなムワリの寺院がある。すなわち、ヌジェレレ(Njelele)、ドゥラ(Dula)、ジロ(dzilo)、ベンベ(Bembe)である。洞窟の寺院は、それぞれの「内部的」風景をもっている。代々語り継がれてきた水溜り、岩、樹木である。寺院の床は小枝や石で磨かねばならなかった。司祭は、豊穡をもたらす源泉でもあった。選ばれた司祭は、しっかり握ったこぶしの中のミレットを閉じた指の間で発芽させることができたと言えられる。寺院からムワリの神の恵みを受け、豊穡をもたらすと言われる種子が農民に分配された。岩から聞こえる声は、神のお告げとしてジンバブウェの人々の政治的行動に合法性を与える源泉でもあった。

このように考えてみると、19世紀のヨーロッパ人旅行者にとって人手の入っていない「荒野」であり、人間に従属させられていないように思われたマトポの丘の風景は、実際には、狩猟採集民、農耕民および遊牧民との間で数千年にわたって展開されてきた相互交流によって形成されたものである。しかも、マトポの丘の風景は、常に超人間的なパワーを具現した最高位の寺院が存在することで人心をひきつけ、各地で神につかえ、そのパワーをつかさどる霊媒師を介して人々の信仰の中に生きてきた。たとえば、マシング(Masvingo)の遠くでさえ、土地の人々の間でよく知られている「世界創造神話がマトポの丘の創造とともに始まる」と言い伝えられている<sup>23)</sup>。

また、シヨナ人の3分の1を占める南シヨナのカラंगा人(Karanga)の間には、ムザナバブウェ(Mudzanapabwe)の信仰がある。カラंगा(Karanga)の神話にも、神の子、ムザナバブウェがどのようにして天から丘に降りてきたかを語るところがある。ムザナバブウェは見知らぬ土地に弓、矢、赤い糸をもって入った。この土地は、暑くて乾いており、植物も動物もいなかった。そこで彼は別れ際の父の言葉—「大きな岩の上に生命がある」—を思い出した。カラंगाは、マトポの丘を「水溜りの石」(mabwe adziva)と呼び、ムワリの神を「雨をもたらす石」として讃えた。このように、石と水の結びつきは、マトポの丘の風景のイメージの中

心を占める。ムワリの司祭が言うように、人々は丘に暮らすことができる。というのは、岩がもたらす水がこの丘の人々の暮らしを支えてきたからである<sup>24)</sup>。

今日、マトポの丘は、狩猟採集民によって描かれた壮大な岩絵 (rock paintings) で有名である。岩に描かれた絵には、空間は決して示されることなく、型にはまったパースペクティブ (遠近法) も見られない。サン人の神話や儀礼の研究から何かを読み取ろうとすることも可能であろうが、マトポの丘の絵画は、雨からはじまって動物にいたるまでコントロールしようとする人間の衝動を表現している。雨は、農民や牧畜民と同様に狩猟採集民にとっても重要である。雨にまつわる儀礼は、それが発展してムワリの寺院になるはるか前にマトポの洞窟の中で行なわれており、ムワリの司祭の神話と慣行のなかには古くからの「霊的な能力」 (spiritual potency) の要素が含まれていた<sup>25)</sup>。

マトポの丘に対するアフリカ人の見方を考察しておくことは、ムワリ・カルトがその神話 (mythology)、儀礼 (ritual)、土地と岩についての「読み方」 (reading) において、白人の画家や写真家とは根本的に異なる「映像」 (picture) を構築しているのではないか、という点を探る上で無意味ではない。19世紀後半にペインズやオーツやその他のヨーロッパ人がマトポの丘に到着した頃、その姿に心打たれとしても、彼らの心象にはそれらは歴史をもたない山々として写った。しかし、当時でさえもこの丘は、すでにアフリカの人々のイマジネーションの深いところにとどめられていた。また、この土地に暮らす人々のイマジネーションを含めた読み方 (imaginative reading) は、一つ一つの岩の仔細な違いを区別しながら記憶する能力と結びついていたのである。

#### 注

- 1) Paul S. Landau and Deboah D. Kaspin eds., *Images and Empires: Visuality in Colonial and Postcolonial Africa*, University of California Press, 2002, p.27.
- 2) Roland Barthes, *Mythologies*, New York, Noonday Press, 1992. *Paris-Match* は、1949年に創刊されたフランスの週刊誌で、国内および国際ニュースが紙面を彩る。
- 3) Paul S. Landau and Deboah D. Kaspin eds., *ibid.*, pp.321. なお、竹沢尚一郎『表象の植民地帝国—近代フランスと人文諸科学—』世界思想社、2001年、およびD. キャナダイン著、平田雅博・細川道久訳『虚飾の帝国—オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ—』日本経済評論社、2004年を参照。
- 4) Paul S. Landau and Deboah D. Kaspin eds., *ibid.*, p.320. ジョン・マッケンジーは、『プロパガンダと帝国』の中で、イギリス人の意識 (consciousness of the British) の文化的背景に帝国主義の側面を持ち込む上で宣伝の役割に注目した。近代的な形態の宣伝の起源は、19世紀末にあった。数多くの学問的原理や影響力の大きな文化形態と共通して、宣伝の発展は、帝国主義盛期 (the age of high imperialism) と完全に重なっていた。その結果、おそらく当然のこととして、宣伝は、帝国の権力—それを象徴する軍事行動、探検家、政治家、技術など—の拡大を利用し、それを情報源として活用したのである。(John M. MacKenzie, *Propaganda and Empire: The manipulation of British public opinion. 1880-*

1960, Manchester U. P., 1984.) しかし、第二次世界大戦後、脱植民地化が現実のものとなり、植民地出身の移民がイギリスに流入し、イギリスの相貌を変え始める。たとえば、消費者向けの企業の宣伝は、商品の販売にアフリカ系黒人のイメージを利用することを控えた。こうした変化を無視することができなくなった企業の宣伝部は、かつての植民地への関与を演出する上で、自らもまた「変革の触媒」(catalyst of change) を標榜する。すなわち、「発展した世界」の企業は「発展途上にある」諸国が近代化・工業化への道を歩む上で、その変革を促進する役割を演じているというイメージを宣伝し始めるのである。それは、「脱植民地化=近代化」というイメージの形成をさす。(Anandi Ramamurty, *Imperial persuaders: Images of Africa and Asia in British advertising*, Manchester U. P., 2003.) イマジネーションについて考察する場合、コミュニケーションをはかる手段(媒体)として、また長年にわたって蓄積されてきた歴史と文化の運び手として言語の役割に注目しなければならない。しかし、帝国主義の下で抑圧する側と抑圧される側が出会うとき、言語はバイブルや剣と同じように武器となり、抑圧する側は、自らを守るための手段として言語を利用する。「帝国の言語」としての英語には、それ自らがもたらした弊害がある。植民地化の過程で「帝国の言語」は、支配下におかれた人々にとってあたかも自分たちの言葉であるかのように、また、帝国によってもたらされた言語以外に母語がないかのように、教えられる。そのためにかりにアフリカの言語がすべて死滅するようなことにでもなれば、アフリカの人々は自分たちにとって決してポジティブに表記されない概念をもつ言語で自らを規定しなければならないだろう。(Ngugi wa Thiong'o, *Moving the Centre: The Struggle for Cultural Freedoms*, James Currey, 1993. Ngugi wa Thiong'o, *Decolonizing the Mind: The Politics of Language in African Literature*, James Currey, 1986.)

- 5) 北川勝彦「ジンバブウェの解放闘争における政治、社会およびその遺産」(戸田真紀子編『帝国への抵抗—抑圧の導線を切断する』世界思想社、2006年、97~135ページ) John Iliffe, *Africans: The History of a Continent*, Cambridge, Cambridge University Press, 1995, pp.271-284. なお、船田クラークンさやか『モザンビーク解放闘争史—「統一」と「分裂」の起源を求めて—』御茶ノ水書房、2007年、井上和明『ジンバブウェの政治力学』慶応義塾大学出版会、2001年を参照。
- 6) Paul Nugent, *Africa since Independence: A Comparative History*, Hampshire, Palgrave, 2004, pp.260-261, 325.
- 7) E. Hobsbawm and T. Ranger, *Invention of Traditions*, University of Cambridge, 1983. (前川敬治・梶原影昭他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年) T. Ranger, *The Invention of Tribalism in Zimbabwe*, Mambo, Gweru, 1985.
- 8) アフリカ史における「風景」に関する総合的研究としては、Ute Luig and Achim Von Oppen eds.. "The Making of African Landscapes" in *Paideuma: Mitteilungen zur Kulturkunde*, 43, 1997. を参照。David Cohen and Atieno Odhiambo, *Siaya: The historical anthropology of an African Landscape*, London, James Currey, 1989. Terrence Ranger, *Voices from Rocks: Nature, Culture and History in the Matopos Hills of Zimbabwe*, Oxford, James Currey, 1999. 本稿は、主としてこのレンジャーの研究に依拠している。
- 9) Terrence Tanager, "Making Zimbabwean Landscapes: Painters, Projectors, and Priests" *Paideuma*, 43, 1997.
- 10) T. Ranger, *ibid.*, p.72.
- 11) J. P. R. Wallis, *Thomas Baines of King's Lynn: Explorer and Artist, 1820-1875*, London, 1841, pp.8, 31, 34, 45, 51.
- 12) R. F. ケネディの編集した手書きのジャーナルで、これは、*Journal of a residence in South Africa, 1842-1853* (Van Riebeeck Society, 42, 45, Cape Town, 1961, 1964) の2巻本の形で出版された。The

- Baines African Collectionは、29巻に編集され、手稿、水彩画、鉛筆画などが収録されている。オッペンハイマーについては、Theodore Gregory, *Ernest Oppenheimer and the Economic Development of Southern Africa*, Cambridge University Press, Cape Town, 1962.を参照。
- 13) 1862年8月までにいたるこの遠征は、*Explorations in South-West Africa : being an account of a journey in the years 1861 and 1862 from Walvisch bay, on the western coast, to Lake Ngami and the Victoria falls*, London, 1864.の中で説明され、描かれている。
- 14) J. P. R. Wallis ed., *The northern goldfields diaries of Thomas Baines, 1869-1872*, London, 1946. 本書の序文にバインズの旅程の概略が解説されている。この時期のスケッチブックは、ロンドンのサウスケンジントンにある自然史博物館に収められている。The gold regions of south-eastern Africa, by the late Thomas Baines, Esq., F. R. G. S., accompanied by a biographical sketch of the author.....London, 1877.は、彼のマタベレランド旅行の情報を知る重要な著作であり、東トランスヴァールの金鉱地を含む、南部アフリカの金鉱への旅行者の情報の解説である。なお、本書は、Thomas Baines F. R. G. S., *The Gold Regions of South Africa*, Rhodesiana Reprint Library, Vol.1, Book of Rhodesia, Bulawayo, 1968.として復刊された。
- 15) T. Ranger, *ibid.*, p.60.
- 16) *The northern goldfields diaries of Thomas Baines, 1869-1872*, London, 1946, Vol.1, p.66.
- 17) T. Ranger, *Voices from the Rocks : Nature, Culture and History in the Matopos Hills of Zimbabwe*, James Currey, Oxford, 1999, pp.14-16.
- 18) T. Ranger, *ibid.*, pp.27-29. なお、Frank Sykes, *With Plumer in Mashonaland*, Constable, London, 1897.を参照。
- 19) T. Ranger, *ibid.*, pp.30-32.
- 20) T. Ranger, *ibid.*, pp.39-42. R. K. Rasmussen, *Historical Dictionary of Zimbabwe/Rhodesia*, The Scarecrow Press, London, 1979, p.339.
- 21) T. Ranger, "Making Zimbabwean Landscapes", pp.64-66. 長期的にはマトポについての多様な白人のイメージは、互いに矛盾するようになった。マトポの丘は、野性生活を楽しむ遊び場および農場として見られなくなった。今日、自然に対する白人の支配は、マトポでは、それを開発するよりも風景を保存することで表現されるようになった。
- 22) T. Ranger, "Making Zimbabwean Landscapes", pp.69-70.
- 23) T. Ranger, "Making Zimbabwean Landscapes", p.71.
- 24) T. Ranger, "Making Zimbabwean Landscapes", p.71.
- 25) T. Ranger, "Making Zimbabwean Landscapes", p.72. Peter Garlake, *The Painted Caves. An Introduction to the Prehistoric Art of Zimbabwe*, Modus Publications, Harare, 1987, pp.19-21. ジンバブウェの解放闘争におけるゲリラと農民意識をつなぐ霊媒 (spirit mediums) の役割については、以下の古典的研究を参照。Terence Ranger, *Peasant Consciousness and Guerrilla War in Zimbabwe : A Comparative Study*, James Currey, London, 1985. David Lan, *Guns and Rain : Guerrillas and Spirit Mediums in Zimbabwe*, James Currey, London, 1985.